

天理図書館蔵 正応二年鈔本 白氏文集卷第四の訓点(承前)

宇都宮睦男

十四、音便について

正応点には、次のような音便が見られる。但し、用例はその全てを挙げてはいない。

〔イ音便〕

- ① 初置時ハシテオシキハ (430)
- ② 何所ナニノトコロニシ (433)
- ③ 驚去オドロキサヌ (468)

右は力行四段活用動詞連用形が過去助動詞「キレ」又は接続助詞「テ」に続く時にイ音便化したものであるが、前二者は現行では見られない形である。

〔ウ音便〕

- ① 向ムカフテ (431)
- ② 追オステ (433)
- ③ 随シラカフテ (439)
- ④ 舞マフテ (439)
- ⑤ 擔ツツメテ (439)
- ⑥ 奪ウサフテ (440)
- ⑦ 養カフテ (446)
- ⑧ 呼ヨブテ (451)
- ⑨ 語カクテ (457)
- ⑩ 言イハフ (461)
- ⑪ 笑ワラハフ (464)
- ⑫ 向ムカフテ (472)

右の例は八行四段活用動詞連用形が接続助詞「テ」に続く時にウ音便になるものであって、そのウ音を「フ」表記で統一していることが注意される。

- ⑬ 病時ヤマクセシトキ (448)

右の例は「ヤマヒ」の「ヒ」がウ音便現象ウ音便起した例であって現行では普通見られないものである。
右はク活用形容詞連用形のウ音便で、これはウ表記をとっている。

〔撥音便〕

- ① 没イシテム (464)
- ② 歸カヘシムテ (463)
- ③ 去サヌ (459)
- ④ 去サルトキハ (465)
- ⑤ 去サヌ (464)
- ⑥ 賣ウツテ (463)

右はラ行四段活用動詞連用形が完了助動詞「キレ」に続く時に撥音便化したものである。但し、⑥は接続助詞「テ」に続いて撥音化したもので珍らしい例である。その仮名表記は「ン」又は無表記であって、正しい仮名表記になつてゐる。

- ⑦ 死シムテ (454)
- ⑧ 去サヌ (438)

右はナ変活用動詞連用形が接続助詞「テ」又は過去助動詞「キレ」に続いた場合であるが、一方は撥音の無表記にし、他方はム表記で誤っている。

- ⑨ 不遊サルコト アムクマハ (426)

(1) [mu] の撥音表記 (延語数 86例)

(1) △表記のもの (82例)

- ① 状 (428)
- ② 慕 (429)
- ③ 助 (438)
- ④ 何如 (440)
- ⑤ 有 (445)
- ⑥ 知 (446)
- ⑦ 介 (449)
- ⑧ 介 (452)
- ⑨ 介 (453)
- ⑩ 介 (460)
- ⑪ 介 (468)
- ⑫ 涙 (450)

右の12例のうち、①②③は推量助動詞「ム」の表記で

あるが、用例が多く、極く一部を例示したに過ぎない。
次の(ロ)のン表記のもの2例を例外として、他は全て△表記
表になっていて、当時としては、驚くべき正しさである。

(ロ) ン表記のもの (4例)

- ① 遍 (433)
- ② 况 (464)
- ③ 汝 (454)
- ④ 東 (461)

(2) [mi] の撥音表記 (18例)

(1) △表記のもの (17例)

- ① 刻 (430)
- ② 削 (431)
- ③ 罷 (432)
- ④ 踏 (433)
- ⑤ 涕 (431)
- ⑥ 銀 (453)
- ⑦ 筆 (459)
- ⑧ 女 (464)

(ロ) ン表記のもの (1例)

- ① 女 (464)

(3) [bi] の撥音表記 (3例)

(1) △表記のもの (3例)

- ① 嘉 (438)
- ② 弄 (456)
- ③ 號 (468)

(ロ) ン表記のもの (ナシ)

(4) [ni] の撥音表記 (24例)

(1) ン表記のもの (零表記を含む) (25例)

- ① 去年 (444)
- ② 去年 (442)
- ③ 死 (448)
- ④ 奈何 (432)
- ⑤ 何 (444)
- ⑥ 何 (449)
- ⑦ 安 (450)
- ⑧ 朽 (460)
- ⑨ 不肯 (447)
- ⑩ 作 (449)
- ⑪ 泣 (461)
- ⑫ 来 (465)

(ロ) △表記のもの (3例)

- ① 去歲 (438)
- ② 不肯 (448)
- ③ 不肯 (469)

(5) [ri] の撥音表記 (4例)

(1) ン表記のもの (3例)

- ① 去 (449)
- ② 成 (456)
- ③ 泣 (464)

(ロ) △表記のもの (1例)

- ① 疾 (437)

以上のようになる。そのうち(1)③は△表記が本来の
もので、(4)⑤はン表記が本来のものである。両者ともに、
△・ン表記の混同が見られるのであるが、それを分類整
理すると次の表のようになる。

この表からわかることは次のような点である。

(A) (1)③で正しく△表記されていゝものは83%に達し、
混同例(ン表記)は僅かの4%に過ぎない。

| 總計 | のものが本が記表ン | | | | のものが本が記表ム | | | | ム表記の例 | 用例数(%) | 合計% | | | | | |
|-----|---------------|--------------|------------|-------------|----------------|--------------|---------------|---------------|----------|------------|------------|--------------|------------|--------------|--|--|
| | 小計 | (5) [pi] | (4) [ni] | (3) [bi] | (2) [mi] | (1) [mu] | (0) ム表記 | (1) ム表記 | | | | | | | | |
| ム表記 | 106 (76.3) | 4 (12.5) | 1 (2.5) | 3 (7.5) | 3 (10.7) | 25 (89.3) | 5 (4.7) | 102 (95.3) | 0 (7) | 3 (100) | 1 (5.6) | 17 (94.4) | 4 (4.7) | 82 (95.3) | | |
| ン表記 | 33 (23.7) | 28 (87.5) | 3 (7.5) | 3 (10.7) | 107 (100.0) | 3 (100.0) | 18 (100.0) | 86 (100.0) | | | | | | | | |

独自のものとみられる。
 以上は、全体的に概観した場合のことであるが、以下、

てゐる。これは鎌倉時代末の一般的傾向に反し、正応点

(B) (4) (5) で正しくン表記されてゐるものは約5%に達し、混同例(ム表記)は僅かの2.5%である。
 (C) (A) (B) から、正応点の和訓の換音表記は原則的に正しいといえる。
 (D) 總計欄を見ても、永仁点の場合、同じような調査結果によると、ン表記がム表記の三倍近く多くて、これが鎌倉末頃の一般の方表記法であるといわれるのに対し、正応点の場合は、永仁点と正しく反対で、ム表記がン表記の三倍近く多くなつてゐる。

内容的・個別的に見ると、なお次のような特色がある。即ち、正応点の換音表記には、

(E) 推量助動詞「ム」の表記は圧倒的にム表記が多い。(ム22例、ン2例)

(F) (1) (4) の「ム」の換音表記は全部で七例あるうち、一例のみがン表記であるのに対して、他は全てム表記で正しくなされてゐる。これは、永仁点の場合、全てがン表記であつたのと大きく相違してゐる。

(G) (4) の①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿のうちに、零表記があつて、これは、平安朝以来の古い表記法を残存するものとみられるのに対し、永仁点には、このような零表記はなく、ン又はムで表記しようとしてゐる。勿論、この零表記は[n]の音の表記の場合のみに見られる。

このように、正応点には、平安以来の古い表記法を忠実に残存してゐる面がある。
 次に、漢語の換音表記についてみる。テキストの分量の約半分の約1/2までを調べたものである。漢字音の三内換音韻尾のうち、舌内韻尾[n]と唇内韻尾[m]の表記を調べると、次のように分類される。

(1) 舌内換音韻尾[n]をン表記したもの(異語数4例)

| 分類 | 果語数(%) |
|-------------------|-----------|
| (1) [n] をン表記したものの | 74 (88) |
| (2) [m] をム表記したものの | 10 (11.9) |
| 小計 | 84 (100) |
| (3) [m] をム表記したものの | 16 (67.6) |
| 小計 | 16 (100) |
| (4) [m] をン表記したものの | 7 (30.4) |
| 小計 | 7 (100) |

以上の分類の結果を表にすると次のようになる。

- (1) 唇内撥音韻尾 [m] をン表記したものの (7例)
- ① 沈 (435)
 - ② 沈 (435)
 - ③ 沈 (437)
 - ④ 音 (444)
 - ⑤ 三 (446)
 - ⑥ 練 (447)
 - ⑦ 甘 (449)
- (2) 唇内撥音韻尾 [n] をム表記したものの (10例)
- ① 殿 (425)
 - ② 殿 (425)
 - ③ 獻 (427)
 - ④ 人 (430)
 - ⑤ 仙 (436)
 - ⑥ 錢 (437)
 - ⑦ 丹 (438)
 - ⑧ 川 (448)
 - ⑨ 前 (449)
 - ⑩ 煎 (449)
- (3) 唇内撥音韻尾 [m] をム表記したものの (16例)
- ① 範 (429)
 - ② 心 (429)
 - ③ 全 (429)
 - ④ 函 (427)
 - ⑤ 藍 (428)
 - ⑥ 兼 (428)
 - ⑦ 階 (431)
 - ⑧ 艶 (436)
 - ⑨ 深 (436)
 - ⑩ 漸 (438)
- (4) 唇内撥音韻尾 [m] をン表記したものの (7例)
- ① 沈 (435)
 - ② 沈 (435)
 - ③ 沈 (437)
 - ④ 音 (444)
 - ⑤ 三 (446)
 - ⑥ 練 (447)
 - ⑦ 甘 (449)

上の表から明らかになる点は次の如し。
 (A) [n] の場合より正しい表記 (ン表記) は九割

近くで、[m] の場合の正しい表記 (ム表記) は七割近くである。[m] の場合はやや低率であるけれども、両者とも大體区別を保っているといえる。
 (B) 混同は [n] の場合より少なく、[m] の場合より増加して三割に達する。これは当時、ム表記よりも、ン表記の方が優勢になって来た現象の反映とみられる。
 (C) 永仁点の場合と比較すると、[n] の場合は正安点の方が遙かに良く区別を守っており、一方、[m] の場合には、両者とも三割程度の混同をしている。
 以上、和語と漢語の場合を総合して、正安点の撥音表記の特色を述べると、和語の場合は、圧倒的に正安点の撥音表記が正しく、永仁点が全く混同して来たのに対し、特色を有している。これは、正安点の加点者が、(1) 撥音表記の正しい文集古点を忠実に移したためか、(2) 加点者自身が努めて正しい表記に心掛けたかのいずれかである。これに比べて漢語の場合は、[n] 表記の場合は正安点の方が遙かに正しく、[m] 表記の場合は永仁点と同じ程度に区別 (七割程度) を保っている。つまり、漢字音の撥音尾の表記は鎌倉時代の一般的傾向にある程度、正安点も近づいている面があるといえるのである。

十六、中古音形を残存せるもの

鎌倉末期には一般的でなく、平安以来の古い表記を残存しているものとして、次のようなものがある。

〔ムマ〕

- ① 千時 (427) ② 馬去 (434) ③ 馬一 (436) ④ 馬蹄 (438)

〔ムマコ〕

- ① 付子傳孫 (435)

〔ムバラ〕

- ① 掌蓮花眼 中 刺 (435)

右の「ムマ」「ムマゴ」「ムバラ」は、平安時代には表記通り、夫々、〔ma〕〔mago〕〔mbara〕と語頭音が撥音に発音されたのであろうが、院政時代以後は、

〔m〕↓〔u〕の音変化に因り、夫々、〔ma〕〔mago〕(又は

〔mago〕)〔ubara〕(又は〔bara〕)と発音されたと見られる。

それにもかかわらず、このような表記法をしているのは、移点に際して、親本の表記を変えないで、そのまま転写したためと見られる。

十七、漢字音について

まず、漢字音の読み方について、現行(歴史的仮名づかいによる音)と相違するものを、藤堂明保編『学研漢和大事典』の漢音・吳音などの区別と照合してみることにする。すると、次のように分類整理される。

- (一) 漢音と一致するもの
- (二) 吳音と一致するもの
- (三) 慣用音と一致するもの
- (四) 右のいずれとも一致しないもの

右の分類に従って用例を列挙し、且つ問題になる字音については検討をしてみることにする(同一字が数例ある場合は、その中の一例のみを記す)。

- (一) 漢音と一致するもの(57例)
- ① 數・百家 (426) 吳音シ・漢音ス・慣用音スフ
- ② 痛・惜 (432) 吳音ツウ・漢音トウ
- ③ 脂・肉 (433) 吳ニク・漢ジク
- ④ ハ・驢・圖 (434) 吳ツ・漢ト
- ⑤ 向・背 (436) 吳カウ・漢キヤウ
- ⑥ 雜・弁 (437) 吳ザフ・漢サフ・慣ガツ
- ⑦ 細・碎 (437) 吳サイ・漢セイ
- ⑧ 教・響 (437) 吳ネシ・漢ゼン・慣ナン

- ⑨ 歎息 (438) 吳ソク・漢シヨク
- ⑩ 太守 (439) 吳シユ・ス 漢シウ
- ⑪ 白麻 (441) 吳メ・漢バ・唐音マ
- ⑫ 彌免恩 (441) 吳メン・漢バン
- ⑬ 曝布泉 (441) 吳フ・漢ホ
- ⑭ 夫婦 (445) 吳・漢フ・憤フウ
- ⑮ 十カ六 (446) 吳シチ・漢シツ
- ⑯ 蛛網 (446) 吳マウ・漢バウ
- ⑰ 足數 (446) 吳ヒチ・漢ヒツ・憤ヒキ
- ⑱ 網絲 (446) 吳グ・漢ゴウ・憤グク
- ⑲ 可敦 (446) 吳ガウ・漢カウ
- ⑳ 元和年 (447) 吳ニ・漢ジ
- ㉑ 食心 (447) 吳トム・漢タム・憤ドン
- ㉒ ハウ字 (448) 吳ハチ・漢ハツ
- ㉓ 黑白 (448) 吳ビヤク・漢ハク
- ㉔ 元和和 (448) 吳ワ・漢クワ
- ㉕ 青苔院 (452) 吳・漢エン 憤フニ
- ㉖ 粉 (452) 吳シヤウ・漢サフ
- ㉗ 杏梁 (454) 吳ギヤウ・漢カウ・憤ギヤウ
- ㉘ 題 (455) 吳ダイ・漢テイ

- ㉙ 屬 (455) 吳ゾク・漢シヨク
- ⑳ 人 (455) 吳ニン・漢ジン
- ㉑ 年 (457) 吳ロク・漢リク
- ㉒ 親情 (457) 吳ジャウ・漢セイ
- ㉓ 歲賈 (459) 吳サイ・漢セイ
- ㉔ 東一西府 (459) 吳サイ・漢セイ
- ㉕ 到 (461) 吳エ・漢クイ・憤ワイ
- ㉖ 龍舟 (462) 吳リウ・漢リョウ・憤ロウ
- ㉗ 彭城 (462) 吳ジャウ・漢セイ
- ㉘ 人事 (462) 吳ジ・漢シ
- ㉙ 百年 (462) 吳ニ・漢ジ
- ㉚ 鳥 (463) 吳ウ・漢ウ
- ㉛ 顔色 (463) 吳シキ・漢ソク・憤シヨク
- ㉜ ハウ丸 (464) 吳ハチ・漢ハツ
- ㉝ 香火 (465) 吳カウ・漢キヤウ
- ㉞ 粉 (467) 吳モウ・漢ボウ・憤モ
- ㉟ 乳燕 (468) 吳ニユク・漢ジュ
- ㊱ 冠 (468) 吳ク・漢コ
- ㊲ 風 (468) 吳ワウ・漢クワ
- ㊳ 言語 (468) 吳ゴ・漢ギョ

- ④⑤ 三尺 (467) 吳シヤウ・漢セキ
 ⑤⑥ 家 (467) 吳キヤウ・漢カフ
 ⑤⑦ 無 (470) 吳ム・漢ブ
 ⑤⑧ 崩 (490) 吳ミヤウ・漢マウ・慣ハウ・バウ
 ⑤⑨ 上 (470) 吳ツウ・漢トウ
 ⑤⑩ 冗 (471) 吳漢エン・吳ン
 ⑤⑪ 一 (471) 吳イチ・漢イツ
 ⑤⑫ 瑞 (471) 吳モク・漢ボク
 ⑤⑬ 百 (471) 吳ヒヤク・漢ハク
- 右の59例のうち、現行では普通、どのようにに發音されているかを調べると、次のように分類される。
- (1) 吳音で読まれているもの (43例)
- ②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲
 ㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
- (2) 慣用音で読まれるもの (12例)
- ①⑥⑧⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲
- (3) 唐音で読まれるもの (1例) ⑪
- (4) 漢音で読まれるもの (1例) ⑤⑨ 「冗員」 (471)
- 右の(3)の⑤⑨は『学研漢和大事典』によると次のように記してある。

㊱ 冗員 (吳・イン) (漢) 漢の時、人の数。また、一定の
 わくの中にはいる人。人員、定員、冗員 (イン) (よけ
 いな人員) の意味であり、又、
 ㊲ エン (江) (吳) 漢の時、「まる。まるい。方員・員
 石」などの意味となる。

従って、⑤⑨の場合には㊱の方の意味で、『大事典』にも
 用例として挙げておられるように、「シヨウナン」が正しい
 読み方であるが、加えて「エン」の方の読み方に換
 えて、誤っている。

右のように、現行では種々の読み方がなされているが、
 正応点では漢音で全て統一されておるのである。

- (2) 吳音と一致するもの (17例)
- ① 死 (429) 吳セチ・漢セツ
 ② 死 (429) 吳シチ・漢シツ
 ③ 希 (429) 吳レチ・漢レツ
 ④ 寬 (430) 吳ク・クウ 漢キウ 慣ケウ
 ⑤ 文 (438) 吳シチ・漢シツ
 ⑥ 奇 (442) 吳ゼチ・ゼツ 漢ゼツ
 ⑦ 離 (445) 吳バチ・漢ハツ
 ⑧ 艶 (450) 吳コチ・漢コツ

- ⑨ 蕭シヤウ (451) 吳シテ・漢シツ
 - ⑩ 風フウ (453) 吳フ・フウ 漢ホウ
 - ⑪ 富フ (452) 吳フ・漢フウ
 - ⑫ 野ノ (454) 吳シテ・漢シツ
 - ⑬ 窟クツ (455) 吳シテ・漢シツ
 - ⑭ 怒ノ (464) 吳コチ・漢コツ
 - ⑮ 決ケツ (470) 吳コチ・漢ケツ
 - ⑯ 諷フウ (471) 吳フ・フウ 漢ホウ
 - ⑰ 速ソク (473) 吳コチ・漢コツ
- 以上17例のうち、④⑩⑪⑬の四例は「クル」「フレ」の音形で「クウ」「フウ」のウ音脱落とも見られなくはないが、本点は原則的に全訓付割の傾向があることから考えて、これらもやはり、このままの音形を認めて吳者と認定するのが妥当であろう。それでは、白氏文集のような漢籍に何故、このような吳音が混入されたかについては、④は仏教関係語であり、⑩⑪は常用語であつて吳音形が定着していたためであろうとウイコトが考えられるが、⑬は特に日常語という程の語ではないが、「諷」を上郡とする熟語は「諷味、一詠、一誦、一諷」など、今「フウ」又は「フレ」と読まれて、漢音ホウとなる例

は見られない。「諷」字は吳音「フウ」又は「フレ」と読まれることが鎌倉時代に於ても一般的であつたのであろう。

所で、残りの①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑫⑬⑭⑮の13例は、全て韻尾に、右内入声音を有するもので、これらを現行(歴史的仮名遣)では「ツ」と漢音に読むのに、正応点「フ」はと吳音に読んでゐる。これらの語が漢籍において、吳音に読まなければならぬ必然性は考えられなけれど、加點者自身も吳音という意識で加點したとも考えられない。筆者としても、この13例は單純に吳音とせめてしようことにためらいを感じぬものであつて、今後の問題点としたい。

(三) 慣用者と一致するもの(1例)

- ① 蟄セキ 虫チュウ (470) 吳ガフ・漢ナフ・慣ナツ

右の「蟄」字には「チ」「ツ」の二通りの読みがあつて、「チ」は漢音であるが、「ツ」は現行では慣用者とされてゐるものである。正応点にもこのような読み方があつたのであろう。「蟄」は入声韻で唇内入声音であるが、これが「蟄虫」などと熟語として発音される際には、一種の音便現象を起して促音化したもの

かとも考えられる。そういふ点と考慮してか、加点の際
しては、第三次訓として第一次訓「ナ」の右傍に付訓
されている。

(四) (一) (三) いずれとも一致しないもの (25例)

これらのもうの大部分は、広義の慣用音ともいい得る
ものと考えるが、中には誤字その他の理由によって、漢
音でも異音でもないものが混じているとみられる。以下
まず、一つ一つについて検討していくことにする。

① 都門 (42b) 吳ツ・漢ト

漢音トであるが、「都門」などという熟語などに於て
は、広義の音便現象(従つて、便宜助・一時的現象)と
して、「ウ」母音を付して、長音的に発音されることも
あったのであろう。広韻及び「當孤切」である。従つて
この「ト」は、この漢字輸入後の日本的な訛音と考え
られる。

② 砵 (42c) 吳コチ・漢コツ

「砵」字に対して、漢音コツは右傍に付訓されている
が、左訓の「キ」はそむかない字音である。猿投神社
蔵文和二年点には「砵」は作るの、正応点はこの字音
(漢音ギツ・慣用音キツ)を左傍に付したのではないが、

正応点には、既に、九「本文と訓との対応についての」
項で述べたように、

(1) 数種の点本から和訓・字音点を集めて移点したため
か、又は、

(四) (1) のような点本を親本として移点したためか、
のいずれかの理由によって、本文文字と和訓(又は字
音点)とが一致しないものがいくつか見られる。「ナ」
の場合もその一つであつて、本文文字「砵」に正しく、対
応しない「キ」の訓を付訓してしまつたものと考えら
れる。

③ 砵 (42d) 吳漢カク

学研大字典の階層の相定音価(以下「相定音価」と略
称)は「下下」であつて拗音になる要素は見られない。
日本における訛音を表記したものとは見られる。

④ 鐘 (43a) 吳シユ・漢シヨウ

「鐘」の右傍に二つの字音が加点されており、そのう
ちの一訓「シヨウ」は漢音に一致するが、他の「シ」は
不審な訓である。或いは「シヨウ」の語頭音節「シ」
だけと加点したものとみられるが確かでない。

⑤ 踏 (43b) 吳デウ・漢音テウ

「跳」字の右訓「チウ」は漢音であるが、左訓「タク」は不審な訓である。推定音価は「 $\text{t}^{\text{h}}\text{ot}$ 」であつから、本文文字の異同もないとすると、左訓「タク」は日本の訛音かもしれない。

⑥ ハ 駿スシヤク 圖ト (434) 吳漢 シユン

「スヤン」は吳漢音「シユン」に一致しない。推定音価は「 tsien 」であつて、拗音表記が一定していかない頃の古形を示すものと見られる。

⑦ 琪キ 樹シ (436) 吳ズ・ジユ 漢シユ

古訓「シウ」は漢音「シユ」に一致しない。「樹」は推定音価「 tsi 」であつて、開拗音表記の一古形とみられる。

⑧ 細サイ 碎スイ (437) 吳漢 サイ

推定音価「 swai 」であつて、これを「スイ」と表記することもあるが、これはあつたのであろう。

⑨ 不フ 重ジュウ 寔シツ (438) 吳ジチ・漢シツ・憤ジツ

推定音価「 tsit 」であつて、和語の場合には、四つ仮名の混同は室町末頃からとされてゐるが、関東では鎌倉中期の日蓮消息に混同した例がある(土井・森田先生の『国語史要観』93頁)とされてゐるから、正応点のこの字

音も四つ仮名の混同とみてよいらうか。

⑩ 末マツ 熟ジュク (440) 吳ズク・ジユク 漢シユク

「熟」字の右訓「シスク」は漢音シユクに一致しない。正応点の仮名字体は「シユク」とあつて「シスク」としか読めない。推定音価は「 tsi 」であつて、開拗音表記の一古形かとも見られる。正応点は一般的に開拗音表記が現行と一致しないようである。又は、「シユク」の「ユ」を「ス」に誤認して「 tsi 」と表記したことも考えられる。これはどと誤字の例となる。

⑪ 羅ラ 網マツ (441) 吳漢 セウ

神田本白氏文集でも「羅網(53)」とある。推定音価「 swu 」であつて、漢音セウが本音であるが、ややぬめの母音「 e 」を拡大解釈して「サウ」と兼音したものであるうか。これも後世には開拗音に読まれるもので、その表記の一古形とみられる。

⑫ 杜ト 々ツ (443) 吳セサ・漢音サツ

正応点の特色の一つとして、古内入声点「 t 」を「 t 」と誤すことが多いことは既述の通りであるが、だからといって、吳音チー漢音ツの公式に従つて、単純に吳音形とも断定し兼ねる。一応、漢音表記の一古形とみておきたい。

推定音価は「^ハシ^ハ」である。

⑬ ^ハ一^ハ (446) 吳漢チユウ

宮内庁書陵部蔵伝三卷西実傳本も「チウ」とある。

推定音価は「^ハシ^ハ」であつて、この音価でわたり音を強

調すれば「チウ」ともなるわけで、正念噴は「チ・ウ」

と割つて發音してゐたものであろうか。

⑭ ^ハ一^ハ (447) 吳ゲチ・漢カツ

格致神社蔵文和二年点でも同様に「クワツ」とある。

推定音価は「^ハシ^ハ」であつて、有聲声門の摩擦音^ハであ

るが、古く日本語に声門音が存在しなかつたために、や

や近い^ハ音に誤したもの。⑬の場合同様に「カク」を「

クワツ」と合拗音に發音することは日本の訛音の例であ

る。

⑮ ^ハ一^ハ (449) 吳ホチ・漢フツ

文和二年点も「ヒ」と付割してゐる。広韻によつて、

去声未韻の「貴」の項に「髣髴」とあつて、その反切

は「芳未切」とあるので音「ヒ」である。正念噴は「ハ

ヒ」と読まれることもあつたのであろう。

⑯ ^ハ一^ハ (452) 吳ス・漢シユ

推定音価は「^ハシ^ハ」であるが、⑩の場合同様に「シユ」

と現行では表記される音が正念点では揃つて「シス」と

なつてゐる。「シユ」の「ユ」を「ス」と讀つたもので

ないとしたならば、「シユ」の表記がまだ固定してゐな

くて、「シス」と表記されたこともあつたのであろうか。

「ス」の当時の音価は^ハであつたから「シス」は「^ハシ^ハ」

となり、「^ハシ^ハ」に近い發音になることか、このような仮

名表記をさせたものかもしれない。

⑰ ^ハ一^ハ (459) 吳コチ・漢クエツ

⑱でも述べたように、正念点では、管内入聲音^ハを「チ」

で表記することが多く、かゝつて一概に吳音とは断定

できないのであるが、⑰の「クエツ」も同様である。む

しろ、本例などは「チ」表記をしていても漢音である証

明になるものと認められる。従つて、現行の吳音形と一

致する既述の十二例(本項⑮の例参照)も、寧ろ、漢音

と認めの方が適当と考えられる。

⑱ ^ハ一^ハ (460) 吳漢チユウ・漢シユ

推定音価は「^ハシ^ハ」で、⑬と同様に、やはり正念点以

前に於ては、「チ・ウ」と割つて發音されてゐたもので

あろう。

⑲ ^ハ一^ハ (463) 吳ゴク・漢ギョク

推定音価は「[sioŋ]」であって、開拗音節を古く「クキョ
ク」と表記したことの残存形であろう。正応頃は「キョ
ク」と發音されたかと思う。

⑳ 豐ホウ 凶キョウ (468) 吳ク・クフ 漢キョウ

推定音価は「[sioŋ]」であって、語頭音が無声の声門摩
擦音[h]であるから、古く日本では[h]音に誤し、「キ」と
誤ったものである。(468 參照) これも⑭同様古い表
記法を残存しているものとみられる。

㉑ 南ナ 山シ (469) 吳ナ・漢ナム

「南」右訓「ナ」は吳音と一致しない。推定音価は
「[naŋ]」であって、正応点は語尾「ム」を脱したものと
みられる。

㉒ 百ハク 鳥チウ 主シ (468) 吳ス・漢シユ

推定音価は「[sioŋ]」であって、⑩⑭同様「[シユ]」の
期待される所に「シス」となっている。⑭と同じ理由に
よって、誤字でないとする、「[シ]」に近い音を表わす
ものと考えられる。ニウよろい、正応点、開拗音の表記
は現行と相違っていて相当地構異である。

㉓ 喋チカク 々タシ (468) 吳テフ・漢テフ

「喋」右傍には、二種の訓があつて、一方は「テフ」

とあつて漢音と一致するが、地方の「(て)ツ」は吳漢
のりすれとも一致しない。推定音価は「[sioŋ]」で、広韻で
は入声帖韻である。それを、「喋々」などの熟語の場
合、「テツ」と發音することは広韻の音便現象であつて、
このような發音も正応以前には行われることがあつたの
であらう。

㉔ 十シ 代タイ (470) 吳ジフ・漢シフ

推定音価は「[sioŋ]」であつて、広韻入声帖韻である。
それを「十代」などの熟語の場合、「シツ」と促音にす
るのは一種の音便現象とみられ、このような發音も、或
る条件下には臨時的には行われたのであろう。

㉕ 壅ウ 蔽ヘイ (472) 吳ユ・漢ヨウ

推定音価は「[sioŋ]」であるから、わたり音の「[ɪ]」を強
調して、「キョウ」と表記され、又、それと近く發音さ
れたのであろう。

以上の一つ一つの字音の検討の結果を分類整理すると、
次のようになる。

(1) 隋唐音で、介母音[h]を持つ音節の表記において、正
応点では、所謂字音の歴史的仮名遣と一致しないものが
多くみられる。⑥⑦⑩⑪⑬⑭⑯⑲⑳㉓㉕である。このう

らでも特に、⑩⑪⑫は注意すべきであつて、「シユ」の

表記が期待される所に「シス」の表記がみられ、これは「ス」の音価が「u」であることに関係してゐるかと思われ

る。但し、
如^{ゴトク} 觀^{ミル} 奮^{ケン} 擊^{キツ} 朱^{シュ} 此^{ココ} 子^コ 社^{シャ} 支^シ 日^{ニチ} (429)

の傍点部のように「シユ」の仮名表記もある。

(四) 字音の語頭音節だけを表記したために、吳漢音と一致しないものへ従つて全割付割すれば漢音・吳音のりずれみになる。(1) (2)

(一) 所謂四つ仮名の表記が相違してゐるために、吳漢音と一致しないもの。(9)

(二) 舌内入声音「ㄗ」を「チ」と表記したために、吳漢音と一致しなくなったもの。(12) (19)

これらは漢音を、正安本では、「チ」で表記することがあったことを示すものである。

(ホ) 熟語の場合、一種の音便現象(広義の)を起し、それによつて吳漢音と一致しないもの。(1) (23) (24)

(ハ) 正安本の本文文字と一致しない他の本文文字(異文)の字音点を移したために、吳漢音と一致しないもの。(2)

(ト) 正安本では、カ行合拗音に表記してゐるために、吳

漢音と一致しないもの(古い表記法の残存)。(3) (4)

(4) 隋唐音の認識の違いか又は誤認から未だ表記の結果吳漢音と一致しないもの。(5) (6)

(リ) その他、読み方の違いに基づくもの。(15)

以上、(1) (リ) の九項目に分類してみたが、充分な分類と云いえず、誤りもあるであらう。又、あくまでも現行の吳音・漢音の表記を基準にして検討したために、字音の古形の実認識を誤つてゐる点もあるかと思ふ。

十八、反切について

正安本に見られる反切例は全部で17例であるが、これについて、切韻系韻書(唐韻・広韻)、集韻、大広益会玉篇によつて、その異同を調べると列表のようになる。

この表によると、中でも比較的切韻系韻書との一致度が高いけれども、それでも50%以下の低率である。他の韻書に依りては、それより更に低い比率である。正安本の反切が何を基準にしてゐるのかわからない。

| 正念点の反切例 | 唐韻 | 廣韻 | 集韻 | 大正念点反切 |
|--------------------|-------|------------|------------|------------|
| ① 鑊 力朱反 429 | 力朱反 | 力朱切 | 龍珠切 | 力俱切 |
| ② 訛 子礼反 429 | 子礼反 | 十礼切 | 此礼切 | 且礼切 |
| ③ 榆 羊朱反 436 | 羊朱切 | 羊朱切 | 容朱切 | 庚朱切 |
| ④ 溢 比蕭反 439 | 色立反 | 色立切 | 色入切 | 所立切 |
| ⑤ 獨 古玄反 441 | 古玄切 | 古玄切 | 圭玄切 | 古玄切 |
| ⑥ 稍 思焦反 441 | (ナシ) | 相邀切 | 思邀切 | 思焦切 |
| ⑦ 粒 許没反 446 | (ナシ) | 下没切 | 下没切 | 尸没切 |
| ⑧ 羅 良佐反 446 | (ナシ) | 魚自何切 | 良何切 | 力多切 |
| ⑨ 黠 胡八反 447 | 胡八反 | 胡八切 | 下八切 | 閑八切 |
| ⑩ 苑 五羅反 450 | (ナシ) | 五羅切 | 五賄切 | 午回切 |
| ⑪ 橙 私耕反 453 | 宅耕切 | 宅耕切 | 除耕切 | 除耕切 |
| ⑫ 邪 似差反 457 | (ナシ) | 似嗟切 | 徐嗟切 | 以遮切 |
| ⑬ 汴 皮變反 460 | 皮變切 | 皮變切 | 皮變切 | 皮變切 |
| ⑭ 鷄 戎各反 468 | 五各切 | 五各切 | 逆各切 | 五角切 |
| ⑮ 歐 烏侯反 469 | 烏侯切 | 烏侯切 | 烏侯切 | 於口切 |
| ⑯ 詳 側逆反 471 | 側逆切 | 側逆切 | 側逆切 | 側逆切 |
| ⑰ 冗 如勇反 471 | 而隴切 | 而隴切 | 乳勇切 | 如勇切 |
| 正念点の反切 との一致数(%) | 唐韻に同じ | 8/17 (47%) | 3/17 (18%) | 6/17 (35%) |

○印は正念点反切に一致するもの

十九、語法について

語法について注意すべきもののみを記す。

「動詞」

① 忍 ^{シムヤ} 取 ^{トテ} 西涼 ^{サイリウ} 舞 ^{マユ} 為 ^{ナシ} 戲 ^{シラシ} (433)

右は「シノヒムヤ」と上二段活用である。新瀬国語辞典によると「カ」と上二段活用であったが、平安時代以降、四段活用の「儂ぶ」と混同して四段活用の例を生じたところがあるので、正念点の上二段は古形ということになる。その残存したものとなる。

② 不 ^フ 自 ^ミ 逸 ^{イツ} 今 ^{イマ} 不 ^フ 自 ^ミ (426)

右は「ヨロコビズ」と上二段活用である。若狭古語辞典によると「奈良時代には上二段活用で、それが漢文訓詁体の系統には後世まで伝えられたが、一般には平安時代以後、四段活用に転じた」とある。従って、正念点の例は古形の残存形ということになる。

③ 娛 ^{ウレハシメ} 演 ^{エン} 精 ^{セイ} 士 ^シ 眞 ^{シン} 監 ^{カン} 軍 ^{クン} (431)

この「ネギラフ」は普通、四段活用であるが、右の例は下二段活用の例である。当該箇所は神田本でも同じく下二段活用である。

〔形容詞〕

- ① 此^{コノ} 恨^{ウラミ} 長^{ナガク} 在^{アリ} 無^{ナシ} 銷^{シユ} 期^キ (450)
- ② 富^{トモ} 貴^キ 頭^{カビ} 穿^ス 穿^ス 亦^モ 無^{ナシ} 妨^{サマシ} (458)
- ③ 於^{コノ} 句^{コト} 奇^キ 章^{シヤウ} 無^{ナシ} 一^{イツ} 字^ジ (470)

右の例は、新潮国語辞典に「形容詞ナシの古い未然形ナケル相量の助動詞ムの付いた形。後にはナケルとなつて漢文訓読に用いた」とある。所謂上代語法の一つである。

④ 博^{ハク} 勿^ム 下^カ 將^{マシ} 身^ミ 輕^カ 評^{ヒヤク} 人^{ヒト} (458)

右の「カルシク」はシク活用の形容詞とみられる。この語は辞書類にはク活用として掲載されているので珍らしい例である。

〔形容動詞〕

- ① 寄^{ヨス} 言^{コト} 概^{カヒ} 少^{オホキ} 人^{ヒト} 家^{イヘ} 女^{メスメ} (458)

右の「スコシキ」は新潮国語辞典に「スコシクは接尾語キの付いた形。元來は形容詞ではない。この形のままて連用修飾語に用いることもある。」とある。これに「ナリ」がついて形容動詞となつたもので、訓読特有語である。

〔副詞〕

〔助詞〕

- ① 不^ス 言^{コト} 不^{サハ} 咲^{ウケ} 愁^{ウレシ} 殺^{コロシ} 君^{キミ} (449)
- ② 何^{ナニ} 况^{ナニ} 衰^{ホク} 姐^{イモ} 之^ノ 色^{イロ} 善^{ヨク} 能^{コト}
- ③ 君^{キミ} 之^ノ 堂^{ドウ} 令^{コト} 計^ケ 里^リ 遠^{トホシ} 君^{キミ} 之^ノ 門^{カド} 令^{コト} 吼^{ウレ}

右の諸例を見ると、人物を主格又は所有格として表現する「ノ」と「ガ」とには尊卑の使い分けが見られるように思う。即ち、「衰姐之」色の場合「ガ」と訓読し、「君之」の場合「ノ」と訓読して区別が見られる。②の場合「君」に「ノ」と「ガ」と二訓を並記して、「ノ」の方に合点を付していることが注目される。「ノ」と「ガ」の尊卑の区別について述べた宇治拾遺物語も同じく鎌倉時代の作品であるから、その時代の影響を受け、この区別が見られるのであろうか。

- ④ 欲^{ホトシ} 下^カ 開^{ヒラキ} 建^{タテ} 人^{ヒト} 情^{コト} (472)

